枕草子

頭の弁の、職に参り給ひて

頭の弁の、職に参り給ひて、物語などし給ひしに、夜いたう更けぬ。「明日御物忌みなるに籠るべければ、丑になりなばあしかりなむ。」とて参り給ひぬ。

つとめて、蔵人所の紙屋紙ひき重ねて、「今日は、残り多かる心地なむする。夜をとほして、昔物語も聞こえ明かさむとせしを、鶏の声にもよほされてなむ。」と、いみじう言多く書き給へる、いとめでたし。御返りに、「いと夜深く侍りける鳥の声は、孟嘗君のにや。」と聞こえたれば、立ち返り、「『孟嘗君の鶏は函谷関をひらきて、三千の客わづかに去れり。』とあれども、これは逢坂の関なり。」とあれば、

「夜をこめて鳥のそら寝ははかるとも世に逢坂の関はゆるさじ

心かしこき関守侍り。」と聞こゆ。また、立ち返り、

頭の弁が、職の御曹司に参上なさって、お話などしていらっしゃったうちに、夜がひどく更けてしまった。「明日は主上の御物忌みなので殿上に詰めなければならないから、丑の刻になってしまったら具合悪かろう。」ということで、宮中に参上してしまわれた。

翌朝、蔵人所の紙屋紙を重ねて、「今日は、大変心残りがすることです。夜通し、昔話も申し上げて、夜を明かそうとしたのですが、鶏の声にせき立てられて」と、いろいろなことをたくさんお書きになっていらっしゃるのは、たいへんすばらしい。御返事に、「たいへん夜深く鳴きましたそうな鶏の声は、孟嘗君のそれでしょうか。」と申し上げたところが、折り返し、「『孟嘗君の鶏は函谷関を開いて、三千人の食客が、やっとのことでのがれ去った。』と物の本にあるけれど、私の言ったのは逢坂の関のことです。」とあるので、

「夜をこめて……（夜のまだ明けないうちに鶏の声色で函谷関の関守をだますとしても、けっしてこの男女逢うという逢坂の関は、だまされて許すようなことはしないつもりです）

しっかりとした関守がここにはおります。」と申し上げる。また、折

「逢坂は人越えやすき関なれば鳥啼かぬにも開けて待つとか」

とありし文ども(ふみ)を、初めのは、僧都(そうづ)の君いみじう額(ぬか)をさへつきて取り給ひてき。後々のは、御前(おまへ)に。さて、逢坂の関の歌はへされて、返しもえせずなりにき。いとわろし。

さて、「その文は、殿上人(てんじやうびと)みな見てしは。」とのたまへば、「まことに思(おぼ)しけりと、これにこそ知られぬれ。めでたき事など、人の言い伝へぬは、かひなきわざぞかし。また、見苦しきこと散るがわびしければ、御文はいみじう隠して、人につゆ見せ侍らず。御心ざしのほどを比ぶるに、等しくこそは。」と言へば、「かく物を思ひ知りて言ふが、なほ人には似ず覚ゆる。『思ひ隈なく、あしうしたり。』など、例の女のやうにや言はむとこそ思ひつれ。」など言ひて、笑ひ給ふ。「こはなどて。よろこびをこそ聞こえめ」など言ふ。「まろが文を隠し給ひける、また、なほあはれにうれしき事なかりし。いかに心憂くつらからまし。今よりもさを頼み聞

り返して、

「逢坂は……(逢坂は人が越えやすい関なので、鶏が鳴かないのにもかかわらず、いつも関の戸をあけて、来る人を待つとかいうことですよ)」

と御返事があった、これらの手紙を、はじめの手紙は、僧都の君が礼拝までして、お取りになってしまった。それからあとの分は、中宮さまのところに。そして「逢坂は」の歌は、詠みぶりに圧倒されて、わたしは返歌もしないで終わってしまった。まったくみっともない。

そうしてその後、頭の弁が「あなたの手紙は、殿上人がみな見てしまったよ。」とおっしゃるので、「本当にあなたが私を思って下さったのだとは、それではじめてわかりました。すばらしいことを、人が口から口に言い伝えないのは、確かにかいのないことですよ。一方また、見苦しいものが散ると困るので、あなたのお手紙は一生懸命隠して、人には決して見せません。私の、あなたに対する心くばりの深さを、あなたの御心配りとくらべると、同等でしょう。」と言うと、頭の弁は、「そういうふうに物のわけがかわって言うのが、やはり他の人たちと違うように思う。『深い考えがなく、軽はずみに人に見せてしまった。』などと、普通の女のように文句を言うだろうと思ったの

こえむ。」などのたまひて後に、経房（つねふさ）の中将おはして、「頭弁はいみじうほめ給ふとは知りたりや。一日（ひとひ）の文に、ありし事など語り給ふ。思ふ人の、人にほめらるるは、いみじううれしき。」など、まめまめしうのたまふもをかし。「うれしき事二つにて、かのほめたまふなるに、また、思ふ人の中に侍りけるをなむ。」と言へば、「それ、めづらしう、今の事のやうにもよろこび給ふかな。」などのたまふ。

（一三六段）

に。」と言って、お笑いになる。「それはまあどうして。お礼をこそ申しあげましょうに。」などとわたしは言う。「わたしの手紙をお隠しくださったことは、また、やはりしみじみと心にしみてうれしいことですよ。さもなかったら、どんなに情けなくつらかったでしょう。今後もそんな風に頼みにし申し上げましょう。」などとおっしゃったそのあとで、経房の中将がおいでになって、「頭の弁がひどくほめていらっしゃることは知っていますか。先日のわたしへの手紙に、この間のことなどを書いていらっしゃる。わたしの思いを寄せている人が、人にほめられるのは、ひどくうれしいこと。」などと、いかにも真剣におっしゃるのもおもしろい。「うれしいことが二つになりました。あの方がおほめくださっているということですのに、また、あなたの思う人の中に私がはいっておりましたのですから。」などとわたしが言うと、「そんなことを、珍しく、今はじめて知ったことのようにもお喜びになることよ。」などとおっしゃる。